

ぼくの仕事

ぼくは、家庭科が苦手だ。針と糸でネームプレートを作った時なんて最悪だ。自分の名前がなんて書かれていいのか読めないぐらいだった。

家庭科の時間に「家庭の仕事にチャレンジ」の宿題が出た。自分の仕事を決めて家でやらなければいけない。できるだけ簡単にできることはないかなあと探してみた。母さんは、洗たくしながら食事の準備をしているかと思ったら、リビングの片付けまでしている。父さんま、七子きまをぎんの手入れだ。どれも手伝うのは面どうそうだった。

「ゴミ捨てでいいか……」

なんて独り言を言っていたら、

「お手伝いしてくれるの？助かるわあ。母さん、仕事を始めたでしょう、帰るまで洗たく物を干しっぱなしで気になっていたのよ。ゴミ捨ては母さんがするから、まことは、学校から帰ったら洗たく物を取り込んでおいてくれないかしら。」

ぼくがやるとも言っていないのに、母さんはその気になって、たたみ方や片付ける場所を説明し始めた。ちようどかわいた洗たく物の中にあつた給食エプロンを持ってきてアイロンがけの練習まで始めてしまった。うれしそうに説明している母さんを見ていたら、「いやだ。」とは言えなくなつて、つい、引き受けてしまった。

この前の日曜日、サッカーの試合があつた。試合では大活やくだったんだ。それなのに、家に帰つてちよつと横になつていたら、すかさず言うんだ。

「まこと、早く洗たく物を取り込んでよ。汚れてるんだから手をきれいに洗つて。取り込んだら、しわにならないように早くたたんで片付けなさい！給食エプロンにはアイロンをかけるのよ。」

「待つてよ。後でやるから、少しぐらい休んだっていいじゃないか。」

「後に回すとできなくなるわよ。まことの仕事なんだから早くしなさい。」

「ぼくの仕事つて……。母さんが勝手に決めたんじゃないか。」

「決まったことに文句を言わないの。」

「もう、うるさいなあ。休みなんだから母さんがやればいいじゃないか。」うるさく言われるのがいやになつて外に出ると、父さんがいた。花に水をやりたり草を取ったり周りをはいたりしていた。よく見ると背中には汗がにじんでいた。

「どうしたんだ、まこと。」

父さんに声をかけられ、ぼくは、母さんへの不満をぶちまけた。そして父さんは、笑いながら言うんだ。

「なんで、母さんはまことにそんなにうるさく言うのかなあ。」



(なんでって、こっちが聞きたいよ。)

「きつと母さんも大変なんだよ。最近、家でも仕事している時があるだろ。できることは手伝わなきゃな。」
(そんな、ぼくだってサッカーの試合の後で疲れているのに……。)

「そう言えば、この間、まことの給食エプロンを見ながら、アイロンが上手になったって言ってたぞ。」

「えっ？母さんはそんなことまでチェックしてるの？」
「チェックじゃないよ。お前が家の仕事をやってくれるようになってうれいって、母さんとっても喜んでいたんだから……。ただ、お前が学校でいやな思いをしないようにって思っているだけさ。そういえば、この間はボタンを付けてくれていただろう？」

父さんの話を聞きながら、この前のことを思い出した。
給食エプロンに着替えてよしきとふざけ合っていたら、給食エプロンが引っかかって、ボタンが取れてしまったんだ。ぼくの学校では、交代で給食エプロンを使っている。次に給食エプロンを使うのは、きれいで、

しわがあるのもよく気付くさとしだ。月曜日、さとしにまた何か言われるんじゃないかと、アイロンをかけるときも気になっていたんだけど、ポケットに入れていたボタンがなくなっていたから、
「まあいいか。」
って、そのまま袋に入れて学校に持って行ったんだ。

給食時間になって、さとしが着替えている様子をこっそり見ていたら、なかったはずのボタンが付いていた。びっくりしたけど、ラッキー！給食服を間違えて着たんだなと思っていた。すっかり忘れていたけれど、まさか、母さんがボタンを付けてくれていたなんて……。
父さんの話を聞いていたらなんだか胸がジーンとしてきた。

「よし、父さんも一緒に洗たく物を取り込んでやろうか？」

「えっ？ううん……。」

父さんは、うでまくりをして片付けを始めた。

「いや、いいよ。父さんは父さんの仕事を続けてて。」

ぼくはぼくの仕事をやるよ。その前にちゃんと手を洗ってくる！」

手を洗いにもどると、台所からいいにおいがしてきた。
た。

(やったあ、僕の好物のカレーライスだ！)

横を通ると、ぼくに気付いた母さんが、にこにこしている。

「母さん、洗たく物の片付けが終わったら、手伝うよ。」
ぼくは急いで手を洗い、洗たく物を取り込んだ。

